
神崎のジャンプ

村上 峻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神崎のジャンプ

【Zコード】

N6764A

【作者名】

村上 峻

【あらすじ】

神崎の心は一瞬だけ自由に空を飛んだのかもしれない・・・ウシガエルの鳴き声の中で僕らは貴女に狂う・・・

第一話（前書き）

僕にはそれが、すぐ簡単な事に思えた。

第一話

僕にとつてはすぐ簡単なことに思えたんだ。

神崎が・・・ そうあのバカ神崎が、人間の遺伝子の中には鳥になつて空を飛んでいた時の記憶が書き込まれてるって・・・ そつ言いで出した。

あいつはいつもそう 英語の授業で新しい構文を覚えたかと思ったら、その日はずっと英語で喋り続ける。ヒールリフトが出来るようになったと思つたら、空を缶や小石を見つけるなり、ボール代わりに勝負を挑んでいく。

僕は気にならないけど、そんなだから神崎のことウザがつてると奴もいる。

でも僕も、今日の神崎を見ていると、どうかしているとしか思えない。

あいつは屋上に僕らを呼びつけて、今日生物の授業で囁つたことがどれだけばらしことかを興奮して僕らに喋り散らした。あいつの結論はこいつ

「人間は空をとぐるはず」

だから今屋上のギリギリはじつに立つて、ジャンプを見届けようとしている神崎を突き落とすことは簡単なことに思えた。

それがあいつはノートの切れ端のあみだくじで飛び順番を決めたん

だから。僕、神崎、吉田・・・一番手は僕。

それはあなた達と違つて、僕は陸上部ですもの？僕は棒高跳びしてますもの？若干、一般文化部生に比べて、飛ぶことには慣れていますもの。でも、着地地点の運動塔までは、おおよそ、そうオールアバウト3メートルは離れている。こっちの授業塔は4階建て。体育塔との高低差は1メートル。

3メートルっていうのは走り幅飛びではかなりイージーな距離。でもここには健全な部員達がセックストリーヴィングに耐えながら、情熱という炎を燃やすグラウンドの白砂の上ではなくつて。遠くの荒野に吹くような風が吹き、シンナー少年のつばの染みがこびりついた少年院の床のような、コンディションの悪い冷たいコンクリートの上。

失敗したらどうなるか？神崎はそんな事を考える奴じやない。兄貴の友達でこんな奴がいた。工業高校を出て、旋盤工として就職したのはいいけれど、3年のローンを組んで買ったピカピカの新型のスカイラインをそいつは一日で廃車にした。中華街の路地裏の路地裏の小道みたいなところを140キロで・・・平均速度140キロで走つていて、河原沿いに並ぶ屋台の一つと半分を川に沈めたんだ。兄貴はそいつのことを見金入りのバカだと黙っていた。

僕はそいつのことバカだとは思わない。きっと頭の中は、ウーハーから発射される低音と、タバコの煙でいっぱいだったのだろう。アドレナリン過多に陥つて一時的にリスクや危険を計算できなくなつたのだ。

神崎の頭の中も、新しい知識で満たされると、そいつの頭の中と同じようにアドレナリン過多になつてリスクが管理できなくなるのかもしれない。

ともかく僕は、この3メートルを跳ばなくてはいけなかつた。

第一話（前書き）

神崎は空を飛ぶために僕たちを屋上に呼びだした

第一話

呼吸を整えて、目標をずっとずっと遠くに定める。クラウチングスタートの体勢をとつて、集中する。

体を前傾させていくと自然と僕の上履きが一歩を踏み出す。僕はイメージ、どうりにスタートを切った。

アスファルトを蹴る度に僕の体はどんどん加速していく。最高速に達する手前で、僕の右足は屋上のベリを蹴りおろす。

いつもと同じ・・・飛んでいるときに感じる頬を風がくる感覺・・・

・・・見事な着地とまではいかないが、僕の体は体育塔のオレンジ色の屋根の上に着地していた。やっぱり普通の人間なら飛べる距離だ。

神崎が目をパチクリさせて僕に叫んでいる。

「信ちゃん空飛べなかつた？フワツて感じとかしなかつた？」

「しないって・・・！ 神崎はやくとんでよ。早く終わらせて帰ろーぜ」

僕がそう言つと神崎は後ろを向いて腕を組み、何か考えている。

もし仮に、ほんとうに仮に、あいつの考えが正しかつたとしても、この距離をジャンプするくらいじゃ鳥の遺伝子は目覚めない。もつともつと危機的な状況とか、逆にかなり開放的な状況じやないと無理だ。僕はそう思つていた。

神崎が僕ら三人分の鞄をこいつに投げる。これで吉田は飛ぶしかなくなつたわけだ。

神崎が後ろに下がって、腰を折り曲げ、手を膝に付けこっちを見ている。あいつなりに集中をはじめたのだろうか。3メートルだ。
跳べない奴はいない。

神崎が走り出す。太陽がわずかに雲に隠れる。片足で踏み切つて、
神崎の体が宙に浮く。

・・・そのときは手を伸ばして神崎を捕まえようとか、何か叫ぼうとか、そんな事は全然思いつかなかつた。ただずつと面思ひだと思つて付き合つていた彼女から、君、お金目的なの・・・と告白されたときのよう(純な高校一年生の僕にはそんな経験はないのだが)ともかくそのぐらいに一瞬だけ目の前の世界が色を失つた。

神崎は着地に失敗した。

第三話（前書き）

雅楽の音楽と念仏が僕の頭の中でオーバーラップする。吉田は不謹慎にも眠ろうとしているが、僕も神崎も吉田を攻めない。僕たち三人にとって友情とはドライな物。高校球児や、シンクロ青年には絶対に理解できないくらいに。

第二話

雅楽。昨日の音楽の時間に担任のポマードが僕たちにそれを聞かせたのだが、僕はそれに近い物をこんなにほやく耳にするとは思わなかつた。念佛だ。

神崎は死んだ。全身打撲。あいつは校舎の屋上から、砂利の敷き詰められた地面までのわずかな距離を、あいつが望んだように鳥のように飛べただろうか？

僕も吉田も泣いたりはしない。僕達にとって友情とはあくまでドリイな物なのだ。

神崎と一度も口を聞いたことがない学級委員長が答辞を読み上げ、神崎と一度も目を合わせたことがない女子が大泣きした。

答辞の文中では、神崎は明るく愉快で、クラスのムードメーカーとされていたが、実際は違つ。あいつは躁鬱的な性質をもつたバカだ。

僕は葬式が終わるまでの間、神崎と遊んだことや、話したことを一つ一つ思い出していた。いい奴なんて言葉は嫌いだが、僕とは、合う、奴、吉田とも、合つ、奴。いいやつなんて死語だよ。いい奴は奪われ、殺され、死んでいく。僕の持論。

吉田が眠たそうにしている。いいねー吉田ちゃん。友達の葬式で眠る。泣くわけなく眠る。午後の授業をうけているときのよつて眠る。神崎はそう言うスタンスが大好きだった。僕もそう。

でも無理はないよ。昨日神崎が死んでから、担任と、校長と、学年

主任と、教育委員会役員と、警察官と、神崎のおばちゃんに、僕たちが屋上で何をしていたのかを説明したんだから。僕も吉田も家に帰るところはくたくたにつかれていた。

だから、僕は葬式が終わってから何をするか決めていた。コンビニでジャンプを立ち読みするわけでもなく、神崎のことを思いだして感傷に浸るわけでもなく、親のプレッシャーに耐えられず、家族に包丁を向けるでもなく、眠る。ただ眠る。ドライでしょ？僕たち。

第四話（前書き）

神崎は着地に失敗して死んだ。それは何度も口にする」とことで、僕の中で確かな事実としてできあがっていたはずだった。

子供に家の手伝いをさせた方がいい。僕の両親はその言葉を信じているらしく、まだ僕が小さいとき。そう、どうやって子供が産まれるのかとか、僕がそんなことを知らないときから、僕に毎朝、新聞を取つてくるようにしつけた。

それは僕の人生のどこで役に立つことになるか分からぬが、もしかしたらそれが今日だったのかもしれない。

つまり僕には、家を出るときや、家にはいるときに、郵便受けを見る癖がいつの間にか付いており、僕が郵便受けの中の手紙を見つけてのものその習慣のせいだった。

白い封筒に僕と良く似た字で、僕の家の住所と僕の名前が書いてある。おそるおそる封筒を裏返すと、そこにあった名前は、僕がすごくよく知る。よく知っていたと思っていたあいつの名前があった。

神崎

昨日からこの名前ばかりに振り回されている。消印を見るところの手紙が投函されたのはおとついで、それはあいつが空を飛ぼうと言つて出す一日前だった。

僕はそそくせとその手紙を鞄につつこんで、家に入るなり自分の部屋へとまっすぐに向かった。

封筒の入り口をぴりぴりと破る。便せんは真新しい。文章はパソコンによつて書かれているようだ。

もしかして遺書？　あいつが？　まさか・・・。　あいつが死んだのは事故だし、あいつが自ら死を選ぶような厳しい現実を抱えていたなんて、僕と吉田の想像力の五〇〇メートルぐらい外側の出来事でしかない。

それは昨日、何度も口にすることで僕の頭の中で既成事実としてできあがつていったことなのに。あいつは事故で死んだのだ。昨日、そうまるで漫画みたいに、ホントに笑えるくらいに古典的な姿で。頭にカーラーを巻いたまま学校に駆けつけた神崎のおばちゃんにも説明した事実のはずだった。

僕は封筒の中に、猫の生首はないにしろ、剃刀の刃や、なぜか神崎のへその緒が入っていないことを確かめながら、封筒の中から便せんを取り出した。

第五話（前書き）

神崎が僕に残した手紙。

その文面は間違いなく・・・

「信ちゃんがこの手紙を読む頃には、俺はこの世にいないと思う。この世にいないと言つのはあの世にいると言つことで、この世には居ないけど、探して見ればあ？公園にいるかも。なんて言つノリではないことを分かつてほしい。

つまり俺は死んだ。俺の計画がうまくいくているのなら、俺は物理の難しい公式でしか計算でないような力の大きさで、地面に叩きつけられて死んだはずだ。そして、俺は事故死と言うことになつていて、信ちゃんだけがそれが間違いであることを知るはずだ。

つまりあれは事故死ではなかつた。俺は自ら死を選んだ。どうしてそんなことをしたのかつて思うだろ？

hideとも、カート・バーンとも、芥川龍之介とも、三島由紀夫とも、自殺の原因は違う。ゲームや有害映画に影響されて死という概念がチミの中にヒロイズム的なものとして固着していつた結果がこれだよ、ふおう、ふおう、ふおう。なんて言われても俺は反論できる。

話は変わるけど、俺がよつしーや信ちゃんに内緒にしていたことがあるんだ。

実は・・・君たちよりも一足早く大人の男になりましたよ、死ぬ前に。

つまり、初体験。おつと、親戚のおじさんに無理矢理ソープに連れて行かされたわけでもなく、人気の少ない路地裏で犯罪に手を染め

たわけでもないから。

ずっと黙ってたけど俺には彼女がいて、何で黙ってたかっていったらその子のこと紹介しちゃったからなんだ。・・・なんていうか俺はそこそこその子の事が好きだったわけであつて・・・姉さん。

んで 信ちゃんにお願いすることが一個だけあります。彼女の「」とをよろしく頼む！！

俺が死んだ後もあいつがうまくやつていけるか・・・それを確かめてほしんだ。

信ちゃんを男と見込んでの頼みです。陸上部のエースでありながら、エロ本をトイレのタンクの中に隠してるとこなんか男だしー！

そんなこんなで彼女のこと頼む。今までありがとうございましたー。」

神崎の手紙にはそう書かれていた。そして本文の下の方に、この町から少し離れたところにある海沿いの町の住所と、知らない女性の名前が加えられていた。

第六話（前書き）

港町に向かう電車に乗っている。電車の中がリラックスできる場所だと感じられるようになったのは、最近になつてからだ。

第六話

電車の中。それは少し前は僕にとって苦手な場所でしかなかった。それが苦手な場所ではなく、心休まる場所に変わったのは、いろんな事にひどく疲れるようになつてからだ。

この中では僕を縛るような物は何もない。好きな音楽を聞きながら、流れる景色でも眺めていけばいい。ともかく、神崎の手紙に書いてあつた住所は僕の町から少し離れた、海沿いの漁師町の住所だった。

昔、僕の親戚のおばさんといこの誰の誰が住んでいるという関係で、訪れたことがある町だが、堤防に続く下り坂に、生活感溢れる家々が立ち並ぶ、絵本の中に登場するような町だったことを覚えている。

ともかく僕は、その絵本の中の港町に向かう電車に乗っているのだ。

そうそう、葬式があつて一週間立つけれど、吉田なんて殆ど神崎のことを忘れたんじゃないかつていうぐらいに、あいつのことなどを口にしない。僕もこの手紙がなかつたら、あいつの事なんて忘れてしまつていたかもしれない。お調子者が事故で死んだ。それだけ。新聞の中の5行分の言葉であいつの死は世の中に伝えられる。

ぼーっと窓を眺めていたら、窓の向こうで森が途切れ、海が現れた。そこら辺の映画のオープニング何かよりはよくできるじやないのこの景色・・・

あ、それとあの事故があつてから屋上にフェンスが設営されることが決まつたらしい。バカじゃないかつておもう。事故が起こつたの

は、屋上にフェンスがなかつたからぢゃない。僕らみたいな生徒が学校にいたからだ。その分あいつの彼女にあつて、あいつが死んだ原因を探そうとしている僕なんか、教育委員会越えちゃつてるかもね・・・なんて。

それにしても窓の向こうからはどうどんどん近代的な建物がなくなつていいく。英会話学校の看板や、巨大なマンションの姿はこの町にはない。昭和初期ですか・・・ここは?なんて思つていると、木造のプラットホームが現れ、スピードを落とした車両はやがて音を立てずに止まつた。

、はだしのげん、みたいな昭和のお子さまが走り込んでくるに違いないなんて思つていた、開いたドアからは、夏の海を感じさせる塩のにおいが香つてきた。

第七話

改札口には駅員の姿がなつかた。どうやら無人駅のようだ。駅を出るとすぐに神社があり、そのまわりには田園が広がっている。蝉の鳴き声は、僕を大きさに歓迎する。

交番に入つて住所を聞き、手紙に書いてある建物のある場所まで、細い道を歩く。穏やかな古い民家が軒々と建ち並ぶ風景が続いていたが、やがて低く長い生け垣に囲まれた建物が僕の目の前に現れた。建物は2階建ての集合住宅で、その全体がまわりの景色に比べてかなり色あせている。

「・・・古いアパートだな」

僕はぼそりと口にした。手紙に書いてある部屋の前に行き、そつとインターフォンをならした。

しばらくしてドタバタとした物音が部屋の中では響く。

「誰？」

ドアの隙間から現れたのはか22か23ぐらいの少しだんなお姉さんだった。

「あ、神崎の友達なんですけど・・・」

「神崎？」

「はい・・・」

ドアの隙間から部屋の中の様子をうかがうと、白とピンクに統一された家具やカーテンや、筆記体の英語がプリントされたタオルが壁に掛かっている様子が見える。歌手の花崎あゆみのものだろうか・・?

「ちょっと待つてね」

「はい」

彼女はそう言ひ、「携帯電話で誰かに電話をかけていたようだつた。

「・・・らない・・・でも・・・うん・・うん・・そりする・・・わかつた・・・」

彼女は電話を切ると僕に向かってこう言つた。

「ゴメンね、ちょっと上がつてもいいといいかな?」

「は・・・い」

僕は、ほのかな香水の匂いが漂つ彼女の部屋の中に案内された。

短い廊下の両側に、台所と、トイレと風呂。廊下の突き当たりが少し広い部屋になつていて、彼女に言われるがままに、僕は乳白色のソファーに座つた。ソファーのすぐ前のガラステーブルには、プリクラ帳や、化粧品のガラス瓶が並んでいる。ほんとにこのお姉さんが神崎の彼女だったのだろうか・・・

お姉さんは、コップに入れたジュースに丁寧にストローをさして手

ーブルの上に置きそれを僕に勧めた。そしてソファーとは反対の壁側のベッドに足を組んで座った。

「神くんの友達なら……17歳?」

「はい……あのインテリアがおしゃれですね……はは

社交辞令ではなく、本心から出た言葉だったが、彼女は僕の言葉を聞くと、少しうるさいした様子を見せた。

「神くん……事故で死んじやつたんだって?」

「はい、あのでも手紙がきてて……」

「自殺つて書いてあつたんでしょう?」

「え……はい 知ってるんですか?」

僕がそういつたと、お姉さんは斜め下の当たつに目をやり何回かまばたきをした。

第八話

沈黙が続くので、気まずくなつた僕はテーブルに置かれたジュースに口をつけようとしていた。

「あのね・・・これ見てくれないかな？」

彼女は、テーブルの上に薄い冊子を置いた。

「武藏野芸術大学 人間芸術サークル（エリオット） 成立二六年
記念祝賀会・・・」

「サークル・・・？」

「あのね、あたし達本当は東京の人間でね、このサークルの活動でこの町に来てるの」

言われてみれば納得できることだった。彼女のウェーブがかかつた厚みのない綺麗な茶色の髪の毛。真新しい洋服とその着こなし。どちらも、この町の周辺じや見かけないような、テレビや雑誌の中に登場する女人の人姿だった。

「はあ

「だからね、映画を撮り終わつたらあたし達帰っちゃうの、みんな

「はあ・・・」

彼女は、僕の全身を首をかしげたまま眺めている。やがて彼女は僕

の隣にやってきて、ピタリと僕の体にくっつくようして座った。僕の嗅覚を彼女の髪の毛の匂いとメスの体臭が刺激する。僕がごくりと唾を飲み込むと、彼女は僕の反応を楽しんでいるかのように笑つた。

「あのね、これ見てきて欲しいの」

彼女は一本のビデオテープをテーブルに置いた。

「それでね、今度来たとき感想を聞かせて欲しいの。このテープの内容について」

「はあ・・・」

「待つてるから、君のこと。みんなも・・・あたしも」

彼女はそう言いつと手のひらを蝶の羽のよつに動かして僕のふともものあたりに触れた。

僕はそのとき、彼女の田の奥で青いものが光っているのを見逃さなかつた。

「じゃあ、待つてるね」

ドアの向こうで彼女は僕にそう言って、僕も彼女にお礼とお別れを言った。

外は日が落ちかかっていて、どこからかウシガエルの鳴き声が響いていた。

第九話

吉田がさつき自販機で買った三矢サイダーの水滴が、真夏のアスファルトの上にぽたりと落ける。

「信ひちゃんつていつも何も買わないよね

「うん」

帰り道に立ち寄ったコンビニで、吉田はジュークとマガジンとお菓子とかあげを買った。

首から下げる外国のサッカーチームの青いタオルで吉田は汗の吹き出た顔を拭う。

「吉田 あのや・・・」

「何?」

吉田は買ったばかりのマガジンのページをめくしながら僕の話を聞いていた。

「ん・・・嫌」

「なにそれ?」

どうしても僕は吉田に、神崎の手紙のことも、その彼女の事を言い出せなかつた。

「あのやー 吉田の部屋テレビあつたっけ？」

「あるけど、なんで?」

「ビデオ、見れる?」

「あ、見れるよ・・・信ひちゃんHロビでも買つたん?」

「ちがつよ。バカだな」

僕が吉田をいじへと吉田は豪快に笑つた。

吉田の家は、駅の裏の雑居の中につめて、吉田の両親は一人で理髪店を営んでいた。

そのせいか、吉田の家の中全体にシャンプーの匂いのようなものがただよっていた。

吉田は僕達のグループの中では、よく笑いのネタになる。太っていて勉強もあまりできないし、顔もあまりよくない。ただ氣のいい奴で、自分が何を言われても愉快に笑う。吉田のことを嫌っているやつは少ない。

一度、僕と、神崎と吉田の三人でバッティングセンターに行つたことがあるのだが、そのとき吉田は、そのだぶついた風貌がうそであるかのように、ムチのように体をしならせて誰よりも強くボールを捕らえた。

それからしばらく、吉田のあだ名はベースボールスとなり、僕はそのとき吉田の持つポテンシャルの高さに驚かされた。

吉田の部屋の入ってテープをデッキに入れると、画面から映像が流れ出した。

「・・・信ちゃん何これ A▽じゃないじゃん

「だから、ちつき違つていつたじゃん」

吉田はテープの内容がアダルトビデオじゃないことが分かるべ、ベッドに寝こんで、漫画の世界に没頭し始めた。

僕は息をのんでテープから流れ出す映像に見入った。

第十話

1時間ほどだつただろうか・・・ビートオの内容が終わる頃には、吉田は眠つてしまつていた。

吉田を起さないよつこいつそつと吉田の家を出て、集中しきて疲れた頭を休めながら歩いた。

テープは一本立てになつていて、前半はカルマというフランス映画、後半はエリオットが制作中の映画のカットが収められていた。

カルマについてだが、肉屋の主人が、自分の娘を溺愛するという設定の話で、アニエスBというデザイナーが監修に加わったこともあってか、非常に芸術的な作品だった。

問題は後編の映画だ。カルマをベースに作られているらしく、ストーリーが非常によく似たものだつたが、僕が驚いたのは、神崎が俳優として出演していたことだ。

神崎の役柄は 肉屋の娘役であるあのお姉さんにひそかに恋心を抱く青年というものだ。カルマの中で、その青年は自殺してしまいますが、まだそのシーンは撮影されていないようだつた。

テープに收められた神崎の姿は、映画の世界の中で痛めつけられ、段々と衰弱していくのが分かる。

神崎が病院の屋上で彼女に向かつて愛を叫ぶシーンでテープは終わっていた。

そういえばあいつが女の真似をして、僕や吉田や下級生に愛の告白をするという遊びをしつこく続けていた時期があった。今思えば、あれはこの映画のためのセリフの練習だったのだろうか。

カルマの中では、その男は肉屋の娘に愛を告白したあと、教会の屋根から飛び降り自殺をはかる。

あいつは教会の屋根と学校の屋上を間違えるバカでもなければ、映画の撮影と現実を間違える男でもなかつたはずだ。

神崎の死の原因はそつやつて僕の思いもしなかつた方向へと進んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6764a/>

神崎のジャンプ

2011年1月23日14時10分発行